

シンガポール女傑譚

装本 西川 満  
装画 峯 梨 花

## 船は行く行く月夜の海を

明治廿三年、旧曆八月十五日の夜、南支那海を南西へ向かつて航行する、二千トンの貨物船があった。月齢第十五のこととて、見わたす限り藍靛の敷物をならべた洋上には、百千の黄金きんの扇がゆらゆらときらめき、さながら光明真如しんじよの世界であった。この世は万事金という無風流な哲学しかもたぬ水夫長でさえ、しばし甲板にあって、もの思いに耽ったくらいだから、雲ひとつない中天に照る月の、いかばかり澄みきって美しかったことか。

が、哀れなのは、この時、船底の石炭バンカーの中で、港

を出るおり、水夫長から与えられたパンののこりを、手さぐりではほぼぼっている、十七才の宮森フミエであった。船板一枚下は地獄というが、なかなかどうして、フミエにとつては、この船自体が地獄。昼もない夜もない。呼吸ぐるしいまでの暗黒の連続。もしもここに窓があって、きらめく海が見えたら、よしんばそこに鱣が泳いでいようと、イルカが潜んでいようと、千ひろの海こそ、極楽いや天国と思つたであらう。宮森フミエ、その名の示すごとく、おん慈悲ふかきデウスの栄光を信する、彼女は天草キリシタンの生まれ。生まれた時、村の教会の神父さまから、あの恐ろしき徳川南蠻踏絵政策にちなむ、フミエの名を与えられたのだ。サンタ・オベヂェン

なのに、石炭バンカーに十三名の女をつめこんだため、香港についた時は、炭酸ガスの中毒により、内八名が死んでいるではないか。水夫長が十把ひとからげの野心を起こさず、フミエだけを誘詐、奸言、船底から誘拐したことは、デウスの尊き御名にかけて、恩恵でござった。

さても、船は行く。オレンジ色の前檣のランプをゆすぶりゆすぶり、黄金と青とを蹴ちらして。八月の海を、南へ、南へ。

### カイゼル髭の領事どの

「とんでもない。あたしは女中奉公の約束で来たのです。女

中奉公をして、英語の夜学にかよって」と宮森フミエは、必死になって抗弁する。二つあみにしたおさげにはピンクのリップンが結ばれ、ほっそりした肩の上で、二羽の蝶のようにゆれている。口髭の両端をピンとはねた領事どのは、さっきから黙って、フミエを見ている。大きな窓からさしこむあかるい真夏の陽光の下では、たしかに美人である。眼がいい。半月ちかくもぐらの生活をした眼は、いま光を受けて、うるわしく艶やかに、男をひきつけるものをもっている。細い肩、ふるえている長い睫毛。どこかエキゾチックな味さえある。天草？ と問いたただすまでもない。日本名産の輸出品、南洋むけ娘子軍は天草にきまっている。ここ東洋のアントワープ

さん株の女が代つて呼んでくれた初夜の男が誰であつたか。いかにして落花流水したか。作者は、ここにしるす勇氣を持たぬ。あわれ、宮森フミエ。

### われらエジプトにありし時とき

「憶ひ出づるに我等エジプトにありし時は、魚、黄瓜、水瓜くらひともじ、葱、蒜等にんにくを心のままに食へり」とは『旧約聖書』民数紀略にある言葉だが、まことエジプトこそは、物資ゆたかな天使の楽園である。

ナイル河のほとり、四百をこす回教寺院の尖塔が、あくまで青く晴れた空に屹立する首都カイロの、イスマイリア街で

の生活は、フミエ・ウイルキンソンにとって、生涯忘れ得ぬものであつた。ウイルキンソンは英人。貿易商と称しているが、実際は何をしているのだから、フミエにはわからない。

とにかく千弗という金を払って、娼婦の世界から救つてくれた、赤ら顔の、ひどく贅肉のついた紳士である。フミエのどこが気に入つたのか、「ワタシ、オクニ、ナガサキシツテマス。カワイイ、ワタシノコネコ、フミエサン」とカタコトの愛のささやきをかわしてから半月とたたぬうちに、「アナタ、ワタシト、かいろユキマス」と船に乗せてくれた。

カイロがどこだか、フミエは知らぬ。が、汗くさい嫖客との、夜ごとの屈辱から救つてくれた、ウイルキンソンに感謝

海は美し伽藍よりも

逃げよ、といわれても、どこへ行ったらよからう。まさか日本まで、女ひとり大地を歩いて行くわけにはいかない。身はモーゼならねば、杖をさしのべて、「開け！ 胡麻」と紅海の水を二つに割ってエジプトの追手からのがれることもできないではないか。さりとて、以前はともかく、れっきとした英国紳士の妻が、いやらしい鷺鼻のユダヤ人に身を投げだすのは、考えただけでもぞっとする。

思案にあまって、カイロ博物館の横にある写真材料卸小売、長曾我部商店の戸を叩いたのは、どこやらでナイチンゲール夜鷺が啼い

ている、十一時。

「よろしい。かくまいましたよ」と同胞愛に燃えた太っ腹の日本人店主が、二つ返事で承知したので、フミエははじめてホッとした。その後ウイルキンソンがどうなったか、英字新聞の読めないフミエは夫の生死も知らずに、ここで三ヶ月をすごした。もともと愛人というよりは、「パパ、パパ」と甘えて、たよりにしていた程度の夫だから、一抹の寂しさはあれ、保護者に別れたくらいの感情しか湧かぬ。

ところで悲しいのは、修道尼のようにおこないすまして暮らそうと思っても、あたし、身体がいうことかかないわ、あの女性の生理である。婦人というものは、いつの世、いつ

「あたし、死にたくなつた。金はないし」そうだ、君に見せたいものがある」フミエの腕をつかんで、急いで桜井は船室に降り、得意げに中古トランクの蓋をあけた。「これ売ったら金になる」「こんなボロシャツなんか」「まあ、よく見てごらん」シャツをとりのけると、高価な写真機二台、それに、おびたらしいフィルム、印画紙。店主の眼を盗んで、行きがけの駄賃に手早くせしめて来たものだ。まあ！と喜ぶかわりに、人間の心理ほど面白いものはない。浮世の辛酸を嘗めたフミエは、このひと油断のならぬ男だ、と肝に銘じた。

夜襲・奇襲・芥子の粉

芸が身を助ける不幸せ。ぐうたらべえの貧乏えかきを亭主に持ったばかりに、桜井フミエは、広東の街で、大道写真師となつた。はじめは桜井も手伝つたが、彼がうつすとひどく芸術的になつた。曖昧模糊は象徴詩にあつてはよいが、リアルをよるこぶ華客からは嫌悪される。「このほけたところがないともいえぬ、まるでモネーの印象派だ」と悦んでいるのは亭主ばかり。風景はまだしも、人物がピンボケでは、転んでも金を離さぬ広東人は、「これ、だめね。返金よろしい」仕方がないから、フミエが専門に撮影する。

年があけて、広東の街という街が、弄竜や弄獅の行事で賑わう旧暦正月の三日、かきいれ時とばかりに、四牌楼の大通

おんな  
女の全盛蘭々づくし

日清戦争は、日本の大勝利に終った。下関に於て締結された講和条約を見て、いかに日本国民が歓天喜地したことか。その第二条には、あきらかに、台湾全島及び、その附属諸島嶼を永遠に、日本国に割与する、とある。(牢記せよ、台湾の領有は国際間に於て承認された事実なのだ!) いま、日本ははじめ植民地を領有した。台湾へ台湾へと、草も木もなびいた。まさに台湾は日本の新天地! 総理大臣伊藤博文や侯爵西郷従道ですら渡台、台北府前街の料亭吾妻で、お茶羅チャラの膝に凭れかかり、「お茶羅、お茶羅、貴様も来ていたか」お茶羅

は日本橋や向島にもいたことのある名妓。思えば明治廿九年から卅五年にかけての台湾は、女の全盛時代であった。お茶羅ほどの名妓ならよい。名もない女が、女の肉体系オルガンを所有しているというだけで、われもわれもと渡航した。中には手織木綿のゴツゴツに細帯、藁草履という女さえあった。台湾人はこれを見て、「苦力カッリチャボ(女)」と笑ったが、日本人は、「いや、あれは日本の生蕃女」だと弁解した。それでもまだ女の数の方が足りなかった。当時、蘭々づくしというのが流行した。台湾は蘭の名産地だからである。妻を娶った成功者がいると、「ナンダ妻らん」と嘲り、妻を呼び寄せた役人がいると、「ドイツも淫らん」とひやかし、灣妻として妾を囲った

くなる。せっかく貯めた金も愛する男のためには、つい吐きだしてしまふ。愛人、その名を中野勉三郎、福岡の生で三十才。フミエとは三つ違いの兄さんであった。フミエは中野を生涯の夫と定めた。真の恋愛に眼ざめた時、ひとはおのずと貞操を守りたくなる。フミエはむらさきお文から脱却する必要を痛切に感じた。これ以上、台湾にいることはマイナスである。「行きましよう。どこかへ」フミエは中野をそそのかした。行くとなると、旧怨の地ではあるが、獅子の島シンガポールがなつかしかった。ああ、あの日、あなたそがれの鳳凰木の花の色よ！

### 沙漠まばらの中の黄金郷なかに

「小さな洋品店ぐらいで、どうして満足できますか？　お願い、あなたはここで一心不乱に商売をやってください。あたしは百貨店をつくる資本を、濠州でつくって来ます」中野はしばし呆然と、妻の顔をみつめていた。不退転の決意が眉と眉の間に強くあらわれていた。中野はうなずいた。口にだせない淡い不安を覚えながら「あたしの前身が前身なので、御心配なんでしょう？　大丈夫よ、あなたを夫と定めた以上、神に誓って、生涯、こことことは他人に許しません」フミエは唇と下半身の神聖な箇所を指さした。中野はてれて笑ったが、

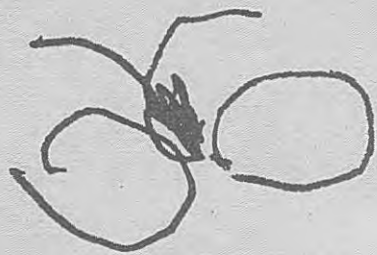
あることを知った時には、さすがに驚きましたねえ」助けられたという日をおそわって指おれば、気絶してからまる二日、名も知らぬミイラと一緒に、沙漠の太陽の下にさらされていたのであった。青年は探険家のよしみだといったが、この身が女でなかったら、おそらくそのまま打ち棄てておかれたにちがいない。あの、黄金欲にとらわれた男のミイラのように！ 戦慄したフミエは、七日ののち退院すると、すぐさまシンガポール行の便船を求めた。

### 花の冠はなかんむりに掩おおわれて

「樹々の緑と花々の栄光に満てるシンガポール」と詩人ヨネ

・ノグチは歌ったが、ハイ街の一角にある中野商会に戻ると、あの荒涼たる死の沙漠とはちがって、庭の旅人木は濃緑に、ハイビスカスの花は真紅に、光の交響楽を奏でていた。風もフタヘ太陽も、ここではこころよいまでになごやかである。ましてここには、やさしく抱擁してくれる夫、勉三郎の陽灼けた腕がある。女には女の限界があることを、中野フミエはハッキリと知った。

青春の冒険に終止符を打った天草女は、あくまで表面に夫を立て商品の仕入、資金の借入、政庁との折衝などに、自分の才能をいかした。そうした面では、天分もさることながら、男相手の人をそらさぬ過去の体験がなによりものをいった。



※シンガポール女傑譚※昭  
和五拾貳年蒲月着手※同年  
葭月開板※著及刊西川滿※  
装画峯梨花※印刷加藤伊之  
吉※装本内藤政勝※版元大  
日本国東京都杉並区阿佐谷  
北四の五の四人間の星社※

シンガポール女傑譚  
昭和52年5月 着手  
昭和53年3月 完成  
限定50部 孔雀版  
¥10,000